

看護部

看護部の理念である「確かな知識と技術に真心を添えて」に基づき、平成20年度は、看護基準・手順の見直し、患者の療養環境の整備に取り組むと共に、日常の看護実践において医師・コメディカルと協働し、患者の抱える身体的・精神的・社会的・倫理的問題と向き合い、患者と共に解決に導くようプライマリー・ナースを中心に関わった。これは、今年度の看護部の目標である「チーム医療を推進し、看護力をアップする」の達成に繋がったと考える。

がん医療を推進する中で在宅支援として緩和ケアの運営を試みた。医学の進歩に伴い、患者はがんと共存しながら生活することとなり、再発への不安や疾患・治療に伴う症状を抱えながら自宅で過ごさなければならない。患者と家族が安心してその人らしく生活できるよう支援するために、平成20年11月から、週1回、緩和ケアを開催した。約4ヶ月の施行で利用された患者は15名（入院患者：10名、外来患者：5名）であり、患者・家族との交流や年賀状・写真集などの創作を行うことによって、気分転換や癒しの時になったという感想が得られた。今後は、より多くの在宅患者に利用されるようシステムを整え、がん患者・家族の在宅療養支援の充実を図りたい。

今まで以上に患者の立場に立った安全で安心できる看護が提供できることをめざして、入院基本料7対1を導入が決まり、診療報酬上で求められている「看護必要度」について判断基準に従った評価を看護師全員ができるよう学習会を計画的に行なった。医師の協力を得て看護必要度管理システムを作成し入力できるまでになり、次年度から7対1入院基本料の届出をすることになった。今後は、入院基本料に値するだけの顧客満足に繋がる看護の提供ができるよう取り組みたい。

病床の有効活用については、毎朝行なう看護師長室でのミーティングにおいて、各病棟の入・退院予定、病床利用状況と空床状況を確認している。平成20年度の病床利用率（一般病棟）は84.6%で、平均在院日数は15.5日であった。ま

た、ICUの利用率は81.5%、結核病棟は41.2%であった。緩和ケア病棟は昨年度(84.8%)を大きく上回り、91.3%の病床利用率であった。平成20年1月に行なった病床再編成は、一般病床の利用率や累計患者数、累計坦送患者数などの病棟格差の緩和に効果があった。入院患者の看護度をみると、たえず観察を必要とする患者が20%、1～2時間毎の観察を要する患者は73%であった。また、患者の生活の自由度では、常に寝たまま:22%、ベッドで身体を起こせる:29%であり、日常生活において不自由がない患者は13%に過ぎず、看護を必要としている患者が多いといえる。

過去3年間の褥瘡発生率の推移をみると、入院後の褥瘡発生率の増減はなかった。褥瘡診療計画書を入院患者すべてに記載し、マットレスの適正かつ有効活用しているが、除圧マットレスの使用の徹底だけでは予防効果は低く、発生率の減少に繋がらなかった。また、患者の状態の変化にも関連するが、発生時のアセスメントが不十分で原因追及ができず、予防対策が適切であったか否かを評価していない現状もあった。次年度は、リンクナースの活躍や褥瘡に関する教育を強化すると共に、発生率の減少、褥瘡治癒率を高める活動を徹底していきたい。

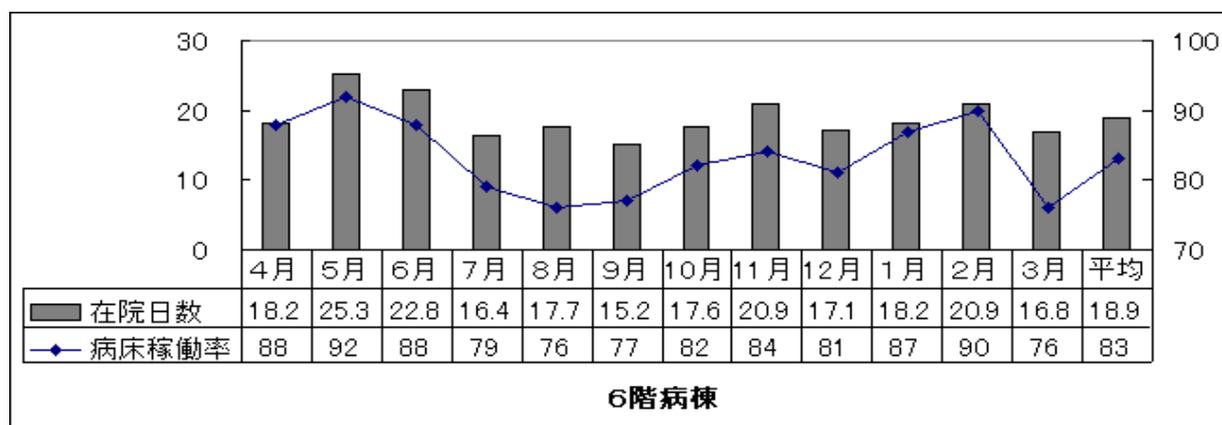
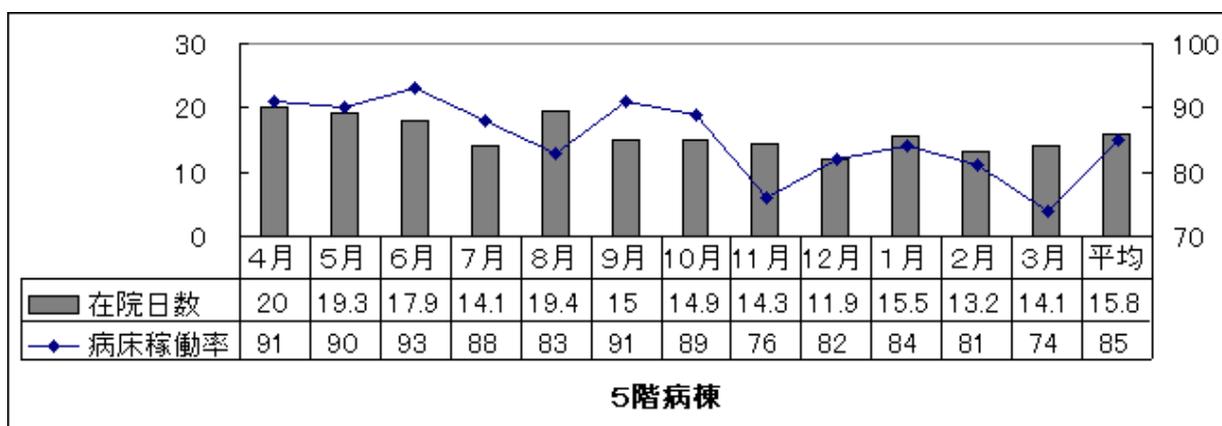
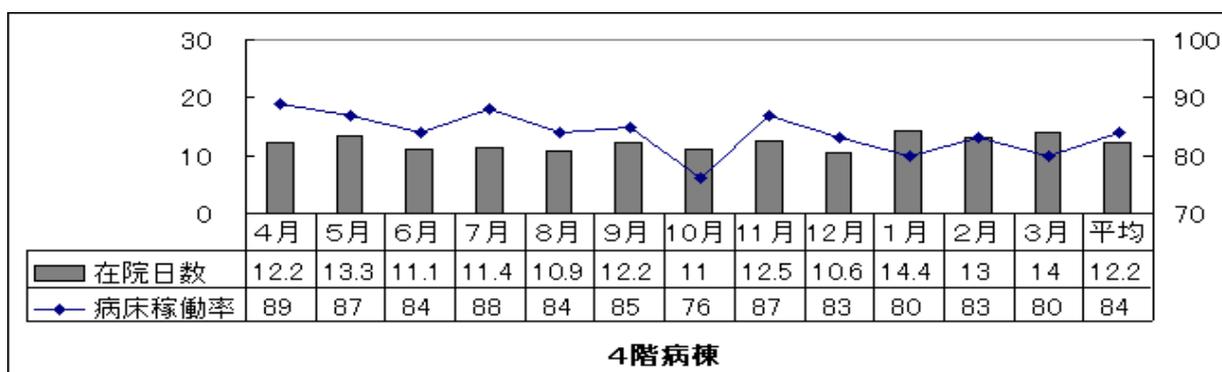
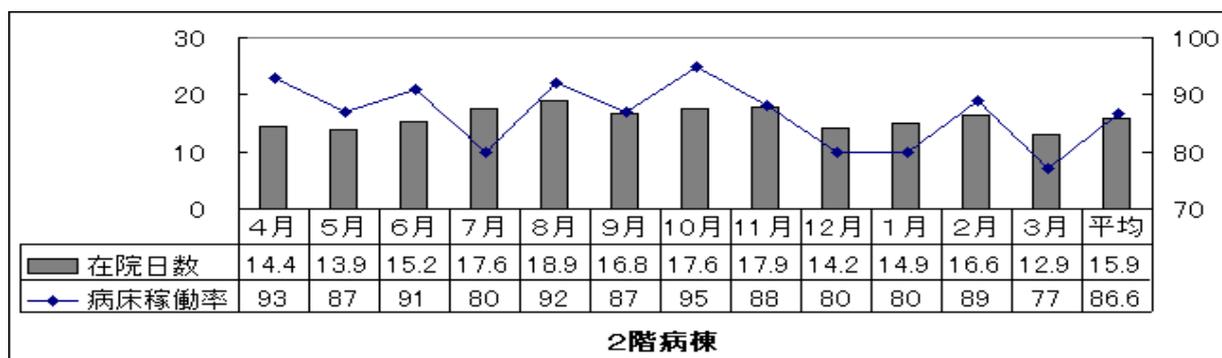
看護部のインシデント・アクシデントは765件で、昨年度763件とほぼ同数であった。レベル別にみると、レベル0:76件、レベル1:658件、レベル2:19件、レベル3a:10件、レベル3b:2件であった。インシデント・アクシデントの内容では、薬物に関するものが299件(39.1%)で最も多く、次いで、転倒・転落164件(21.4%)、検査:69件(9.0%)の順であった。高齢化により、転倒・転落などの危険性の高い患者が増えている。高齢者の場合、認知症を伴っていたり、入院という環境の変化が譫妄を発症したりすることから、危険を予知し早期の段階から予防的対策に取り組んでいるが、転倒事故の発生件数は減少していない。自分のことが自分自身でできることは大きな精神的支えであることを十分に認識し患者との協力体制を強化して転倒事故防止を考えていかなければならない。また、予測困難な部分もあり、倫理的な配

慮をした上で、安全な療養環境の整備を心がけたい。薬物に関するインシデント・アクシデントの予防対策として、5Rの指さし呼称、ダブル・チェックをルールにしているが、インシデントの原因をみるとルール違反や確認ミスが最も多い。今後は、ルールを遵守する職場風土づくりに取り組んでいきたいと考える。

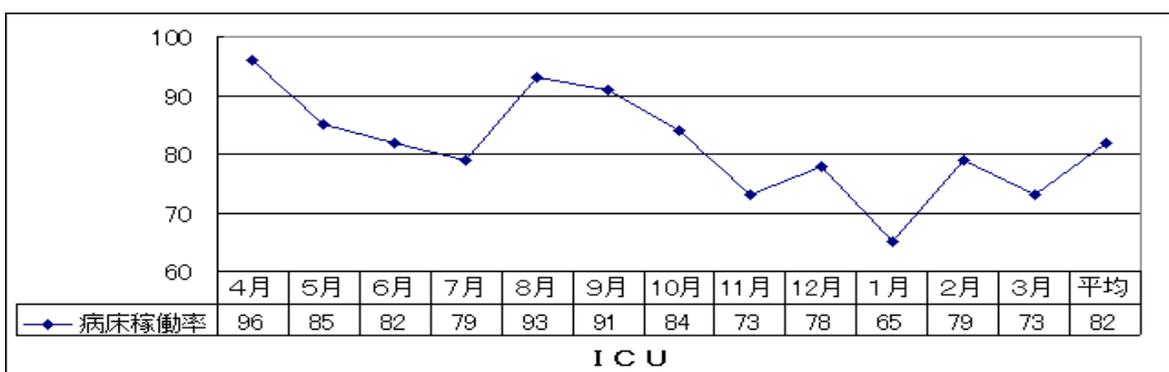
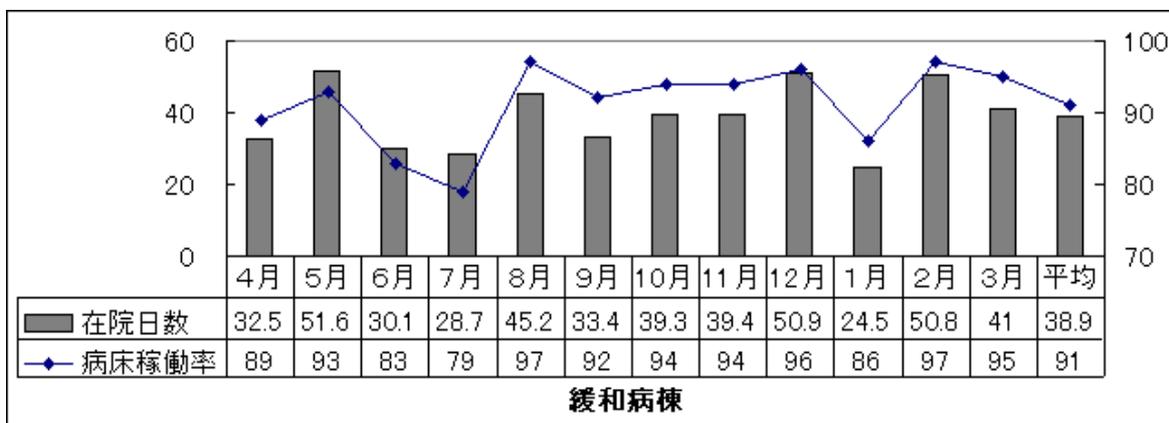
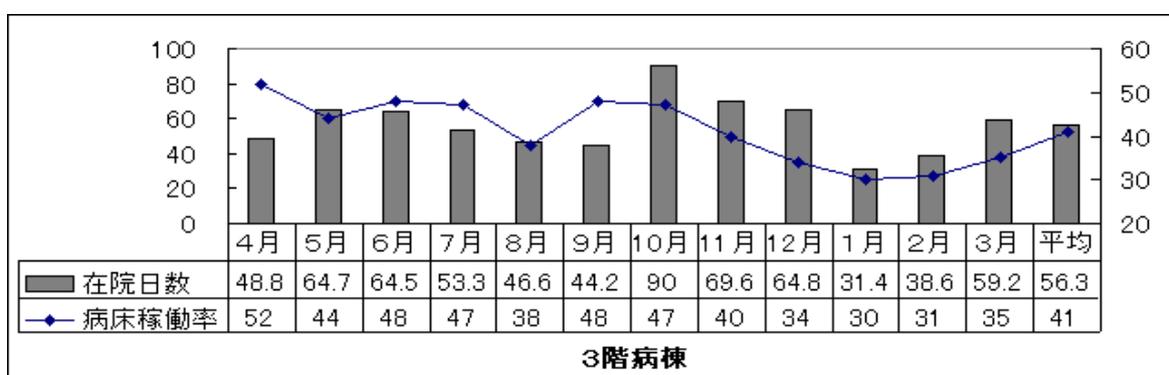
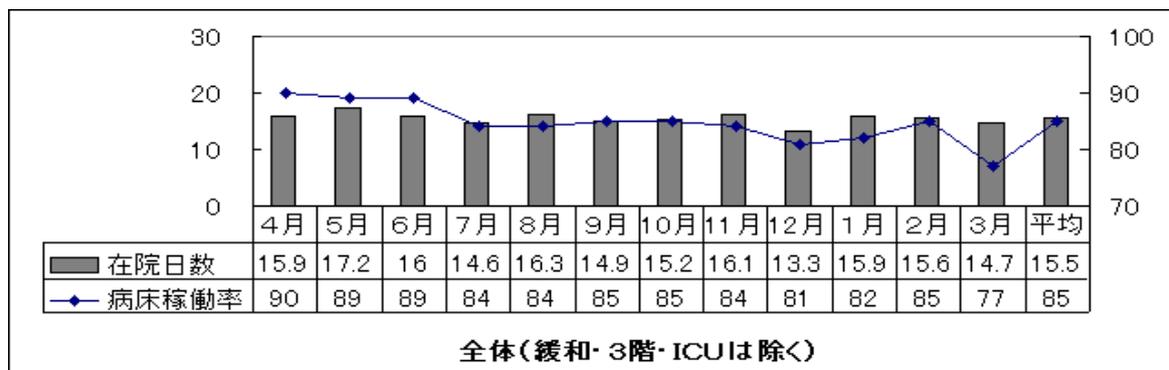
がんの診断・治療、継続看護と外来看護に求められる役割は多くその内容も変化してきている。とくに内視鏡検査は件数の増加だけでなく、ESDやEVLなど高度で時間を要する内視鏡的治療も積極的に行なわれるようになってきている。それに伴い、看護も複雑かつ高度になり、看護師は最新の知識・技術を修得し、安心・安全な看護の提供を提供できるよう日々努力している。

在宅医療へ移行する患者が年々増加し、外来化学療法をはじめとして通院治療を行っている患者が抱える最大の不安は、状態が変化した場合や緊急時の対応である。患者が安心感を得られるようなシステムの構築が外来治療や在宅医療を継続するための課題といえる。そして、外来看護師に求められるものは、どの診療科でも適切な対応ができることであり、外来各部署への効果的なローテーションを行ないながら、看護実践力を高めることである。

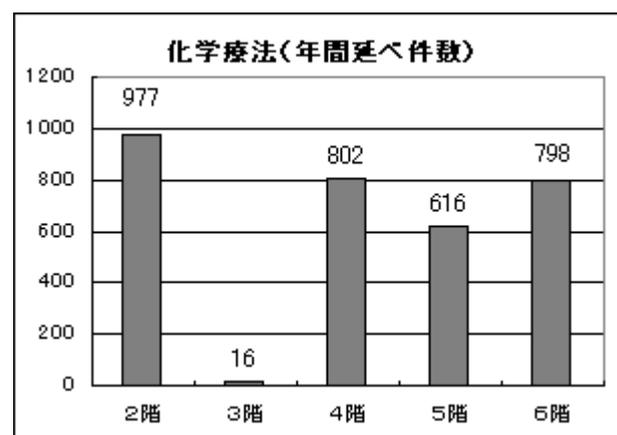
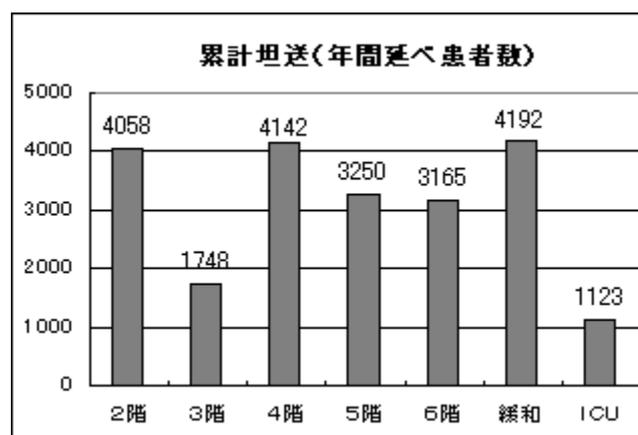
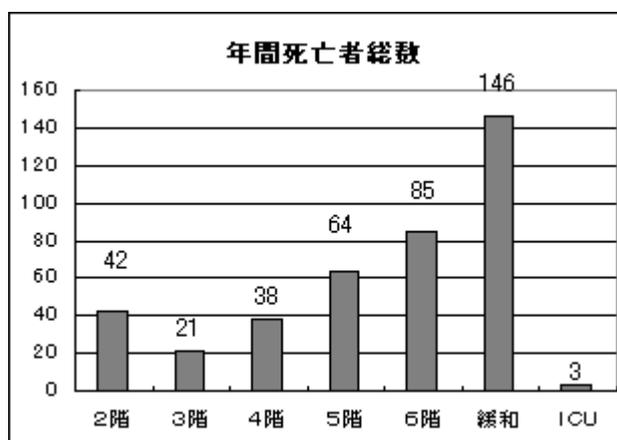
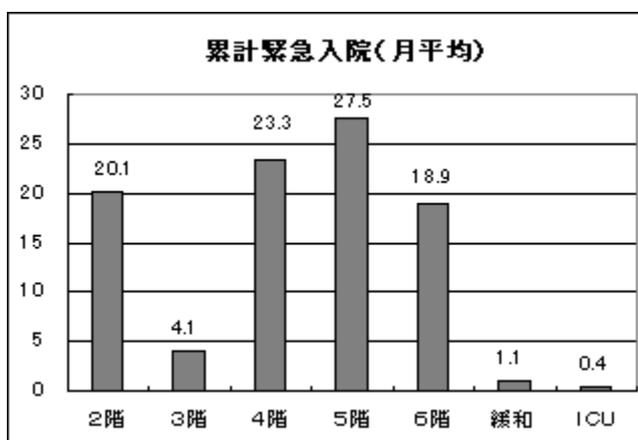
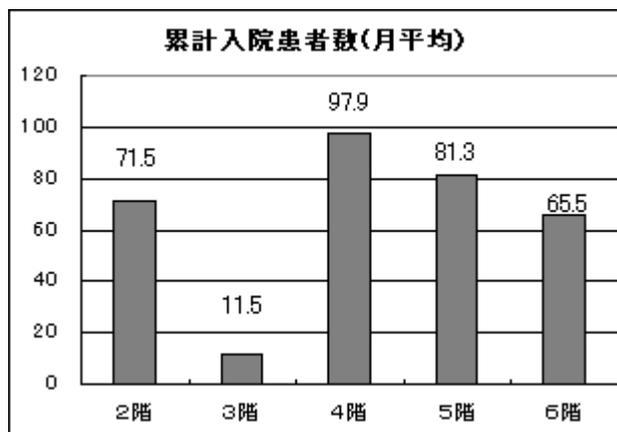
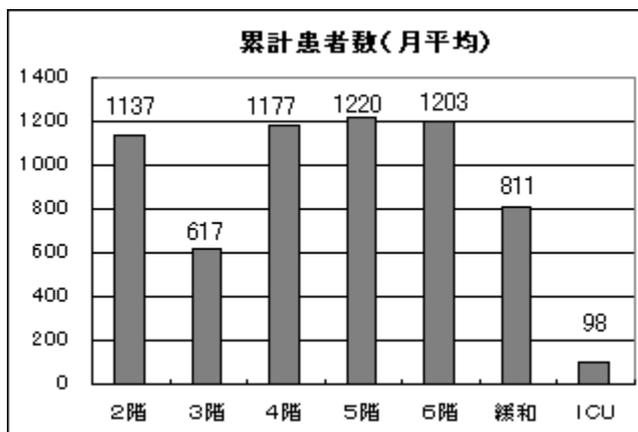
平成 20 年度 病棟別 平均在院日数と病床利用率(月別推移)



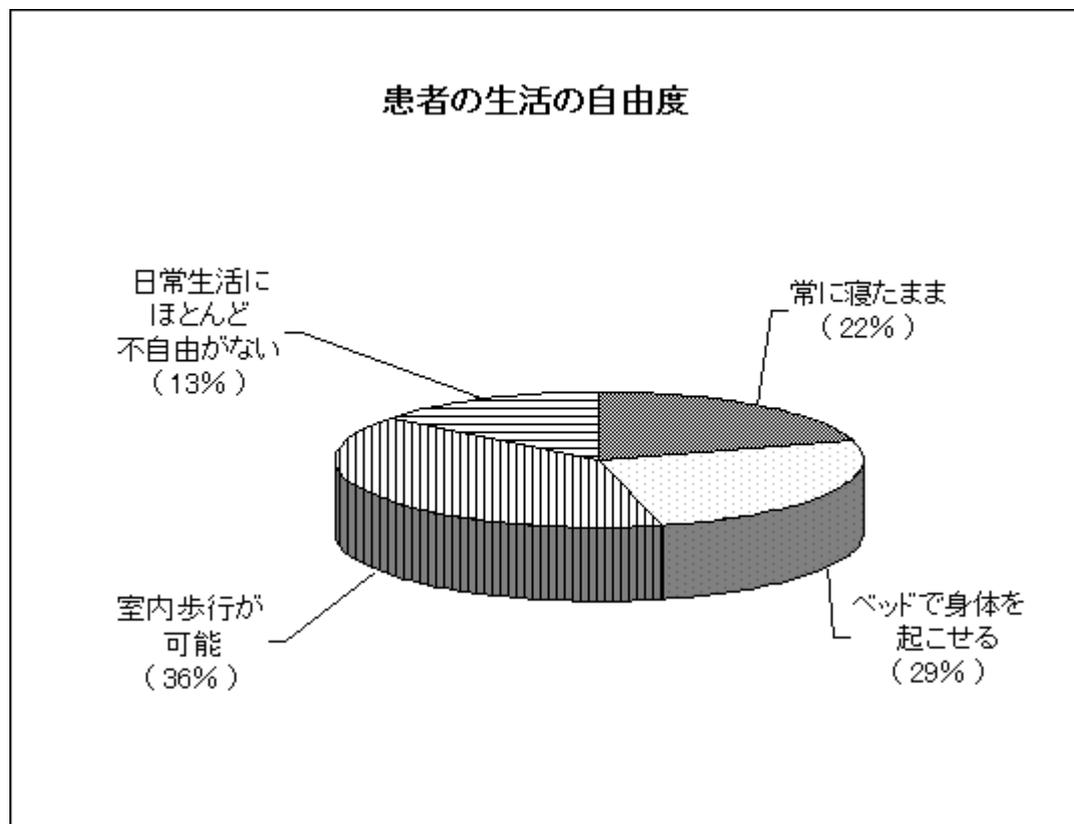
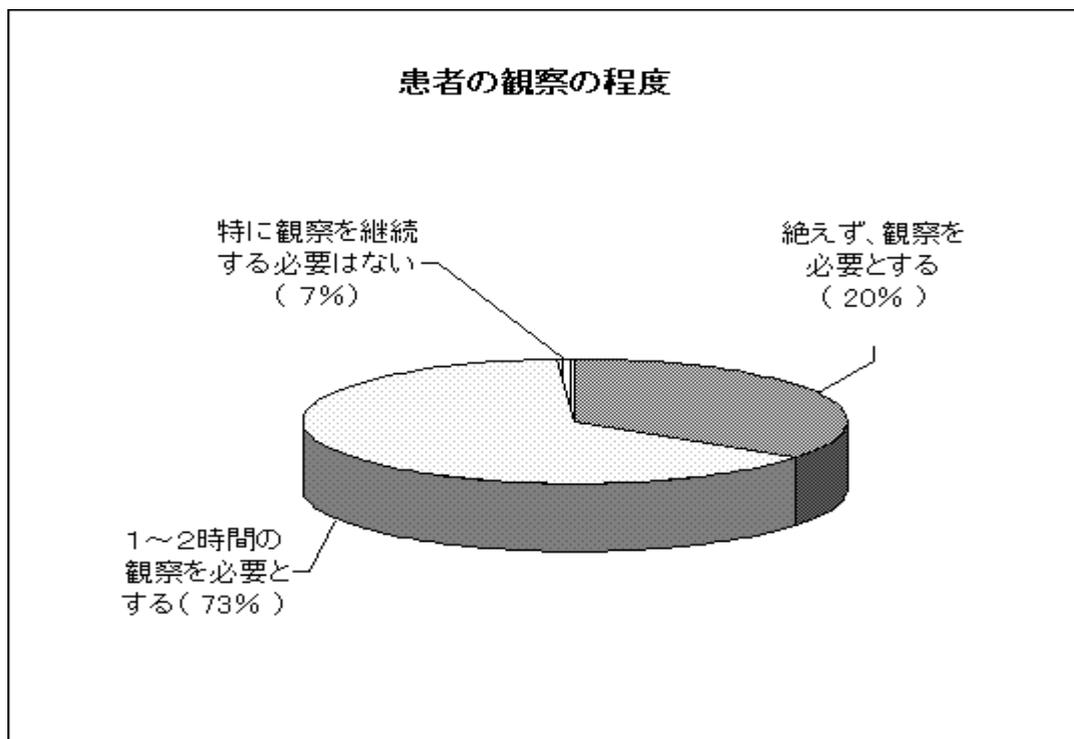
平成 20 年度 病棟別 平均在院日数と病床利用率(月別推移)



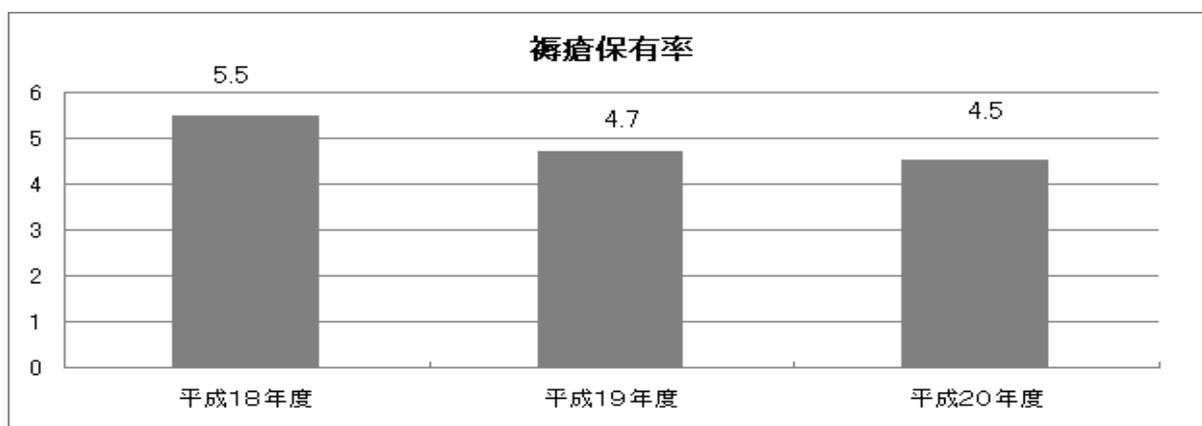
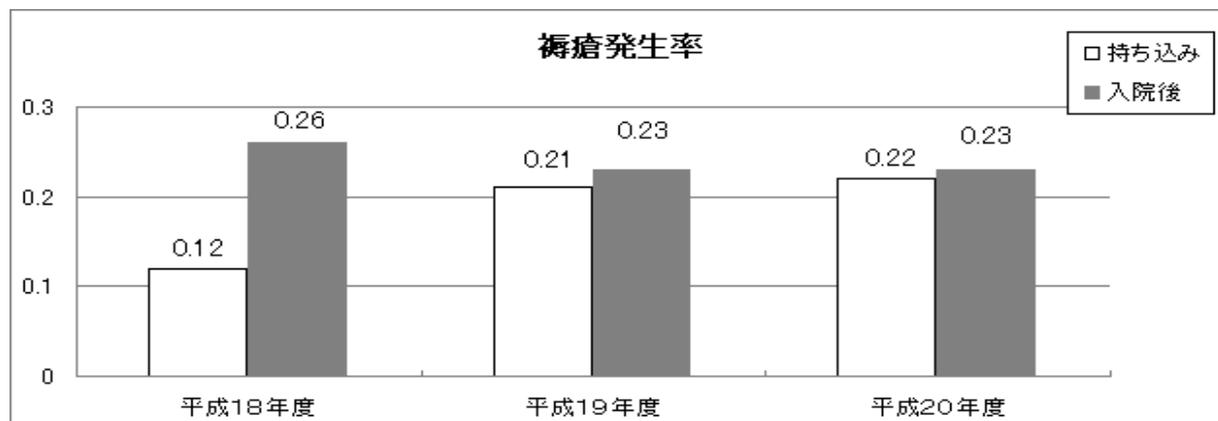
平成 20 年度 病床利用状況(病棟別)



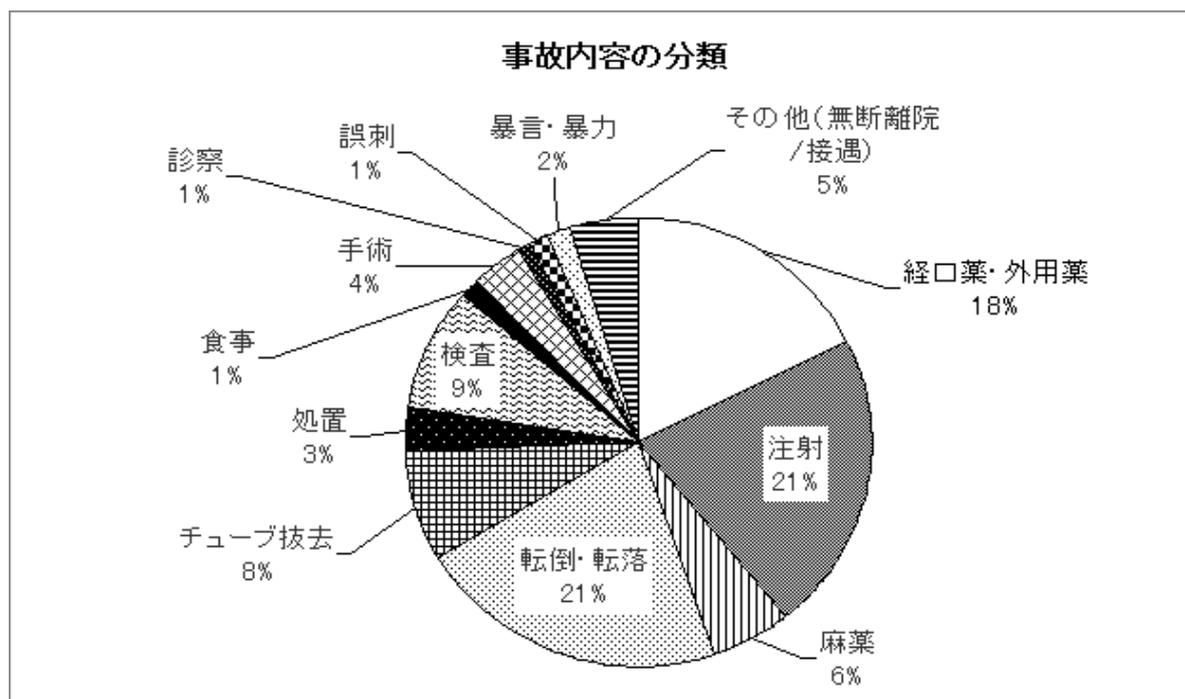
平成 20 年度 入院患者の観察の程度と生活の自由度



褥瘡発生率および褥瘡保有率（過去3年間の推移）



平成 20 年度 看護部 報告のまとめ



平成 20 年度 看護部 報告のまとめ

